“TGベーシック”の現状と課題
― カリキュラム導入からの2年を振り返って ―

千葉　昭彦

1　はじめに　―本研究の課題―

わが国大学のユニバーサル化・グローバル化を背景として、そこでの学士の質保証を図るために大学改革が推し進められている。その中で、2008年12月に中央教育審議会大学分科会から『学士課程教育の構築に向けて』（以下、『答申』と略す）が答申されている。ここでは、今日の学士課程教育に関して次のような認識が示されている。まず、グローバル化が進む社会では学士レベルの資質・能力を備えた人材の育成が求められている。ところが、今日のわが国の大学では学生の数的確保が優先されて、大学教育や学位の水準が曖昧になっている。そのために、各大学では自主的な改革を通じて「学位授与の方針」、「教育課程編成・実施の方針」、「入学者受け入れの方針」などを明確にしたうえで、学士課程教育を構築し、その質保証を図る必要があるとしている。

さて、この三つの方針のうち、「学位授与の方針」に関しては現状と課題、そしてそれに対する改善の方策の例が示されている。まず、現状に関しては、他の先進諸国の大学では「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」を重視しているのに対して、わが国の大学では教育・研究の目的が抽象的であり、大学の多様化が進む中で学士課程の最低限の共通性に対する認識がみられない。また、「学位授与の方針」が教育課程の編成や学修評価のあり方を規定していないともしている。つまり、それぞれの大学の学士課程で学ぶことによって、どのようなことが修得できるのか、あるいはいかなる大学の学士課程においても共通して得られるものは何なのか、と言ったことが必ずしも明確になっていないと言うことである。そのため、『答申』では各大学に対して卒業に当たっての学位授与の方針を具体化・明確化し、なおかつ公開することを求めている。また、国に対しては学士課程を通じて得られる共通の成果としての学士力の指針を示すことを求めている。

この学士力とは、いかなる4年制大学であったとしても、そこでの卒業生が共通して身につけている能力を意味し、『答申』では次のような13項目が示されている。まず、知識・理解に関しては、「多文化・異文化に関する知識の理解」と「人類の文化、社会と自然に関する知識の理解」。次に、汎用的技能としては次のことが掲げられている。日本語や外国語での読み・書き・聞き・話すコミュニケーション能力。自然や社会事象に関して、シンボルを活用して分析し、理解、表現することができる数量的スキル。情報通信技術を用いて情報を

収集・分析し、効果的に活用できる情報リテラシー。情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現する論理的思考力。そして、問題を発見し、その解決のために必要となる情報を収集・分析・整理する問題解決能力の5項目である。また、態度・志向性としては次の5項目が示されている。すなわち、自己管理力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、そして卒業後も自律・自立して学び続けることができる生涯学習力である。そして最後に、以上の能力等を総合的に活用して新たな課題に取り組み、その課題を解決する能力が掲げられている。

大学教育に対する類似の要請として、経済産業省の研究会による社会人基礎力の提唱もあげられる。これは読み・書きなどの基礎学力や仕事などの専門知識に加えて、職場や地域社会などで多様な人びとと仕事をしていくために必要となる基礎的な力としている。具体的には3つの能力と12の能力要素が示されている。すなわち、「前に踏み出す力」として、主体性、働きかけ力、実行力、「考え抜く力」として問題発見力、計画力、想像力、「チームで働く力」としては発信力、傾聴力、柔軟力、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力が掲げられている。社会人基礎力と学士力は、社会人として求められるものと大学教育に求めるものとの間には多少の相違はあるものの、多くの部分で重なっていると考えることができる。

東北学院大学ではこれらの社会の要請に応えて2013年度からカリキュラム改訂を順次実施している。その詳細に関しては次章で記すが、2013年度からは経済学部、経営学部、法学部、工学部で新カリキュラムが導入され、2015年度から文学部と教養学部でも導入する予定である。カリキュラム改訂の内容は各学部とも広範囲にわたるが、教養科目およびその中の人間的基礎教育を構成する科目群と知的基礎教育を構成する科目群からなる通称TGベーシックの新規導入が柱のひとつとなっている。

先行して新カリキュラムを実施している4学部ではすでに新しい教養科目に関してそれぞれ15回の授業が1回もしくは2回終了している。そこで、実施された新カリキュラムでの取り組みに関する検証作業がいくつかのところで試みられている。例えば、新カリキュラムに関する経営学部2年生の座談会[1] では必ずしも上述のような新カリキュラム導入の意図が学生に届いていないことが示されている。まず、学生にはTGベーシックと言う名称自体の認識がみられない。さらには、TGベーシックに属する科目群を示して学生に受講の感想を聞くと、2つの科目を除いて必ずしもよい感想はきかれていない。TGベーシックに対する先生方の理解もそれぞれ異なるようだし、多くの授業では先生からも「やらされている」「やらな

[1] 東北学院大学FDニュースVol.21　学生インタビュー東北学院大学座談会（経営学部）「新カリキュラムおよび東北学院大学の現状と課題―経営学部2年生8名へのインタビュー―」pp.8～18

ければいけないからやっている」と言った雰囲気が出ているし、ほとんどの科目は大教室での講義なので、受身の授業で他の多くの講義と大差がないとの発言もみられる。勉強になったと指摘されている2つの授業は、TGベーシックとの認識とは別に、比較的少人数（とは言っても100人程度）で実施され、なおかつ討論や発表などによる参加型授業や考える時間や自分の問題点を指摘してもらえる授業であることが特徴としてあげられている。

大学が大学改革の中のカリキュラム改訂の柱として設置したTGベーシックに関して、この座談会での学生のとらえ方が多くの学生に共通する見方なのかどうか、より広範囲で確認できるデータから確認する必要があるだろう。そこで、本研究では次章において本学のTGベーシックの設置を含むカリキュラム改訂の経緯とそこで設置されたTGベーシックの概要を確認する。第3章ではこのTGベーシックとして運営されている科目の実態を把握した上で、これまで行われてきた「学生による授業評価」の結果からTGベーシックに対する受講生の見方・とらえ方を探る。そして、最後に第4章でTGベーシックの課題と今後の方向性を考える。

２　TGベーシックの概要

（１）TGベーシック設置の目的とその経緯

TGベーシックを含む教養科目の改訂作業は、直接的には2011年6月から着手されている。ただ、その1年前の全学教育課程委員会において次のようなことが新カリキュラム検討の前提として確認されている。すなわち、東北学院大学は教養教育を重視する大学であること。今日のTGベーシックとの関連で言うならば、「学位授与の方針」のうちの「Ⅰ．よく生きようとする態度をもつこと」が教養教育の「人間的基礎」において担われ、「Ⅱ．知的活動を続けるための基本的技能を身につけること」が教養教育の「知的基礎」において担われること。そして、この二つの領域を教養教育の中で基礎教育として位置づけること。さらに「人間的基礎」教育にはキリスト教学のほか、倫理、こころ、生き方に関する科目、キャリア形成支援科目などを含めることや「知的基礎」教育には学び方、論理的思考、数理的思考、日本語、文章力、情報処理などが含まれることが確認されている。

このことを踏まえて、全学教育課程委員会で審議する原案を作成するための全学教育課程委員会小委員会が2011年6月11日に開催されている。そこでは現在のTGベーシックに関して次のような提案が示されている。「人間的基礎教育」科目は12単位必修とし、「キリスト教入門」・「キリスト教の倫理」（以上、各2単位必修）、「キリスト教と現代」・「現代社会と宗教」（以上、各2単位、いずれか1科目選択必修）、「市民社会を生きる」・「地球社会を生きる」・「科学社会を生きる」・「キャリア形成の基礎」（以上、各2単位、選択）。「知的基礎

教育」科目も12単位必修で、「論理的思考の基礎」・「情報処理の基礎」・「読解・作文の技法」（以上、各2単位で、2科目選択必修）、「数理的志向の基礎」・「統計処理の基礎」・「自然科学の基礎」・「メディア・リテラシー」・「研究・発表の基礎」（以上、各2単位、選択）となっている。ほかにもここでは、非専門科目の卒業所要単位を44単位とすること（「人間的基礎教育」12単位、「知的基礎教育」12単位、英語4単位、その他の教養教育科目16単位）、授業科目を原則半期完結とすること、キャップ制の厳格化、履修科目の登録の時期と方法なども検討課題として示されている。

これらの提案に対して様々な議論がみられた。今日のTGベーシックに関連する部分に限定して記すならば次のようなものがあげられる。「人間的基礎教育」と「知的基礎教育」に配当される必要単位数が妥当かどうか。「市民社会を生きる」と「地球社会を生きる」に内容の重複はないのか。さらには、より根本的な問題提起としては、「教養の修得は、教養科目だけではなく、専門科目も含めた大学教育全体の中で考えるべきではないか」、「『人間的基礎教育』と『知的基礎教育』を学問体系に基づく詳細な解説とするのは適切ではないとしても、学問的内容に基づかない内容であるならば無責任なものになりはしないか」などといった議論も示された。

その後も検討が重ねられ、10月の全学教育課程委員会に次のような小委員会確認事項が提出されている。今日のTGベーシック（当時は「TGスタンダード」と仮称）に当たる科目群は、「人間的基礎教育」と「知的基礎教育」の所要単位をそれぞれ10単位ずつとし、それとは別に英語は4単位必修、英語を除く「その他の教養科目」を20単位として、非専門科目の卒業所要単位を44単位とする。その上で、「人間的基礎教育」と「知的基礎教育」配当されている科目を次のように提案している。前者は、「キリスト教入門」・「キリスト教の倫理」（以上、各2単位、2科目必修）、「キリスト教と現代」・「現代社会と宗教」（以上、各2単位、いずれか1科目選択必修）、「市民社会を生きる」・「地球社会を生きる」・「科学社会を生きる」・「キャリア形成の基礎」（以上、各2単位、選択）。後者はすべて選択で、「論理的思考の基礎」・「数理的思考の基礎」・「統計処理の基礎」・「自然科学の基礎」・「情報処理の基礎」・「メディア・リテラシー」・「読解・作文の技法」・「研究・発表の技法」である。また、授業は半期2単位（通年開講の演習・実習等を除く）とし、キャップ制は１～3年生が44単位、4年生は48単位とする。科目履修登録は4月に通年の登録を行うが、後期開講時に2科目4単位までの変更ができるとしている[2)]。

このような検討と前後して、キリスト教学担当者から「人間的基礎教育」の中のキリスト

[2)] 2014年度からは後期修正に関しては、科目数の制限を撤廃して、年間のキャップ上限の単位数までであるならば取り消し・登録は自由に行えることになっている。

教関連科目のあり方に関する検討の申し入れがなされた。その内容はキリスト教学担当者会議での検討内容を踏まえたもので、具体的には1年生の授業を「キリスト教学ＩＡ（聖書入門）」・「キリスト教学ＩＢ（その歴史と基本的な考え方）」（それぞれ2単位で2科目必修）、3年生の授業を「キリスト教学ⅡＡ」・「キリスト教学B」（各2単位）とし、それぞれ授業に副題として「キリスト教と文化」・「キリスト教と世界」・「キリスト教と諸宗教」・「キリスト教と人生論」を付し、2単位1科目選択必修としている。これに対して、「人間的基礎教育」と「知的基礎教育」に配される授業は、その趣旨を踏まえて科目名称に“学”や“論”をつけないことを原則とすることなどを考慮し、一部修正を加えて現在のカリキュラム構成となった。すなわち、1年生では「聖書を学ぶ」・「キリスト教の歴史と思想」（各2単位、2科目必修）、3年生では1科目選択必修で「キリスト教学A～D」（各2単位）を配し、それぞれ「キリスト教と倫理」・「キリスト教と宗教」・「キリスト教と文化」・「キリスト教と現代社会」と言った副題をつけることとしている。

カリキュラム構成の大枠が定まったことから、その後は「人間的基礎教育」と「知的基礎教育」に配される授業科目の運営責任体制やその授業内容の申し合わせ事項の検討、コマ（時間）数の設定、さらには「その他の教養科目」の構成などに議論が進められた。検討の結果、2012年1月の小委員会において次のように原案報告がなされている。キリスト教科目に関しては上述の通りであるが、その他の講義名について「論理的思考の基礎」を「クリティカル・シンキング」に、「統計処理の基礎」を「統計的思考の基礎」に、「自然科学の基礎」を「科学的思考の基礎」に、「情報処理の基礎」を「情報化社会を生きる」にそれぞれ変更している。

ここではそれぞれの授業の「基本的な考え方」や「到達目標」なども示されたが、それを踏まえて運営責任学部がそれぞれの授業概要をシラバスにより近いものとして提案し、これを会議においてさらに検討を重ねている。なお、東北学院大学の「学位授与の方針」を具体化する全学共通科目であるために、基本的には同一講義は担当者が異なっていても原則的に共通シラバスで実施することが確認されている。そのため、この検討作業にはかなりの時間が割かれたが、紙幅の制約からすべての検討案を示すことはできない。そこでいくつかの簡単な紹介にとどめざるを得ないが、例えば「市民社会を生きる」に関して二つの学部から検討案が示されている。そこでは「基本的考え方」と「到達目標」は共通化されていて、前者に関しては「現代日本において、市民として自律的に責任をもって考える態度を養う。市民社会としての現代社会において生じている諸問題が、自由、平等、人権など市民社会それ自体を支える基本原理の間の対立から生じており、複雑な問題であることを理解させる。適切なトピックを選び、教員による問題提起、解説と学生による討論とをセットにして授業をお

こなうことにより、学生自身が深く考える経験を重ねる」としている。また、「到達目標」に関しても「１）市民社会が自由、平等、人権等の基本的原理から成り立っていることを理解する。２）公共性、民主主義といった市民社会に関わる基本理念を理解する。3)市民社会としての現代社会の諸問題が、自由、平等、人権等の基本的原理間の対立から生じていることを理解し、自分の言葉で説明し、みずからの意見を表明できる」としている。ただ、「授業のやり方」に関しては相違が見られる。一方では「例えば以下のような諸問題を教員が提示し、学生による意見の表明、対立する考え方（立場）に関する教員による紹介などをおこない、問題の複雑さを認識させるとともにみずから考える経験を積み重ねる。・ごみ屋敷はなぜ悪いか・民主主義はいつも正しいか・売春はどうしていけないのか・アファーマティブ アクションは正しいか・高額所得者が税負担を嫌って国外へ移住することは認められるか」となっている。もうひとつの検討案では、共通項目として「市民と政治」として市民と政府、市民と参加や「市民社会の基本原理」として自由と平等、人権、個人主義、公典の利益と個別利益（米軍基地など)、「市民社会の制度」として国家や法律、企業は何のためにあるのか、と言ったことなどを取り上げ、担当者によって「社会保障と税」「人権と管理化・監視化」「市民社会を生きるためのルールとスキル」などと言う項目を取り上げるとしている。

「地球社会を生きる」も二つの検討案が示されているが、これは「基本的な考え方」と「到達目標」が異なっている。一方では「基本的考え方」が「20世紀末から著しく進行している様々な部面におけるグローバリゼーションの諸相を取り上げ、その概要を基本的ことがらとして理解させ、後続の専門教育につなげる」としているのに対して、他方では「グローバリゼーションの進行しつつある現代社会を生きるにあたって、（１）政治経済的視点、（２）言語文化的視点、（３）環境倫理的視点から、それぞれ必要と思われる思考・発想の基本的な枠組みを学ぶ」としている。このことを反映して、「到達目標」は、前者は「グローバリゼーションの諸側面について、現在起こっている具体的事例を挙げて説明することができる」としているのに対して、後者では５つの到達目標を掲げている。すなわち、「（１）グローバリゼーションとはなにかについて基本的な説明ができる（２）グローバリゼーションとローカリゼーションのダイナミックな内的関係性について基本的な説明ができる」そして、これらを踏まえて（３）政治経済的視点から、（４）言語・文化的視点から、（５）環境倫理的視点から、それぞれグローバリゼーションの諸問題を説明できることを達成目標として掲げている。

他のほとんどの講義課目に関しても、複数の検討案が示され、その内容の検討が繰りかされた。その中で、内容を考慮するならば、「科学社会を生きる」は講義名を「科学技術社会

を生きる」に変更することが了解されている。また、「読解・作文の技法」と「研究・発表の技法」はそれぞれ各学科単位で運営することとされたので、担当者から検討資料の提供を受けて、共通項目の確認作業などがすすめられた。さらに、「人間的基礎教育」と「知的基礎教育」を除く狭義の教養科目のあり方に関して教養学部長から「私案」として検討の指針が示されている。それにもとづく検討の結果、この狭義の教養科目においても全学共通として配すべき科目と各学部が選択する科目を置くこと、ただし学生の選択に関してこれらの区別に基づく制約を設けないこと、各学科は専門基礎となるような科目は教養科目には配さないこと（例えば経済学部では「経済学」を教養科目に含めない）などがカリキュラム設計に際しての指針として定められている。なお、2月の小委員会で「人間的基礎教育」と「知的基礎教育」の通称をTGベーシックとすることとし、その後の全学教育課程委員会で了解されている。

その後もTGベーシックの科目群の授業内容に関しては授業内容等に関しての議論が続けられたし、狭義の教養科目の各学部選択決定などに関してはさらに時間が必要であったが、教養科目の枠組みは2012年3月6日の小委員会ならびに同年3月13日の全学教育課程委員会において承認された。

（2）TGベーシックの内容

上述のような経緯で確定したTGベーシックを含む教養教育科目は、それぞれの学科で多少のアレンジを加えながら[3] 2013年度入学生から適用される経済学部、経営学部、法学部、工学部の学科課程表に組み入れている[4]。その中で、第1図と第2図は経済学部経済学科および共生社会経済学科の教養教育科目の学科課程表である。TGベーシックに関しては、1年生に9科目18単位を、2年生に4科目8単位を配置し、さらに3先生でキリスト教学（A～Dうち1科目2単位必修）と選択科目になる「クリティカル・シンキング」の1科目を設けている。教養教育科目の卒業要件は、経済学科と共生社会経済学科ともに、人間的基礎教育は必修科目6単位を含む10単位以上、知的基礎教育は10単位以上で、TGベーシック科目としては20単位以上、その他の狭義の教養科目（学科課程表では第2類）は20単位以上となっている。卒業単位が124単位以上なので、TGベーシックはその約16％、教養教育科目全体では約32％とな

[3] 例えば、経営学科では「読解・作文の技法」を1年生後期に、「研究・発表の技法」を2年生前記に配置し、それぞれ講義ではなく演習形式で実施している。このような授業運営形態の相違が、学生にどのような学修効果の違いをもたらすかは、今後検討に値するテーマであろう。

[4] 文学部および教養学部では2015年度入学生から適用される学科課程表において実施することを予定している。

る。これに外国語科目の必修4単位を加えると、卒業要件の中で非専門科目が占める割合は約35％で、全体のほぼ3分の1となる。なお、3年生への進級要件は両学科で異なっていて、経済学科ではTGベーシックと狭義の教養科目に関連しては必修の4単位を含めた16単位以上となっている。他方、共生社会経済学科ではTGベーシックに関して人間的基礎教育が必修4単位を含む6単位以上、知的基礎教育は10単位以上としている。

経済学部のTGベーシックの講義科目は経済学部の学生のみを受講対象として開講している「聖書を学ぶ」・「キリスト教の歴史と思想」・「読解・作文の技法」・「研究・発表の技法」と、経済学部、経営学部、法学部の3学部の学生を対象として開講しているその他の科目に分けられる[5)]。TGベーシックは、学部・学科で開講時間指定をしない全学部共通開講を原則としているが、「聖書を学ぶ」・「キリスト教の歴史と思想」は語学の授業と同様に受講者を多人数にしないためにグループ指定をしているし、「読解・作文の技法」・「研究・発表の技法」は専門となる学問領域との関連性もあるので既述のようにそれぞれ学部・学科ごとに開講することとしている。そこで、それぞれの授業の内容等を2014年度のシラバスで確認するならば、前者に分類される「聖書を学ぶ」と「キリスト教の歴史と思想」は、それぞれ経済学科クラスの担当者が3名、共生社会経済学科のクラスの担当者が1名、両学科の混成クラスの担当者が1名で、全部で5名が担当しているが、その講義内容、テーマ、達成目標、授業計画は共通化されている。担当者による相違は成績評価方法、テキスト、参考文献においてみられる。「読解・作文の技法」は担当者が経済学科2名、共生社会経済学科1名となっているが、授業内容やすすめ方はすべて共通化しているし、使用する教材・資料等も基本的に共通化している。「研究・発表の技法」は経済学科では担当者2名で授業内容・すすめ方の共通化を図っている。共生社会経済学科では別の1名の担当者が実施しているが、授業内容は両学科の間で達成目標の共通化しているだけで、他はすべて別々になっている。

TGベーシックの中で、経済学部、経営学部、法学部の学生を対象として開講している講義の内容を2014年度のシラバスで確認するならば、人間的基礎教育に分類される授業ではその共通化の程度は大きく異なっている。個々の講義のシラバスを記述・検討するわけにはいかないので、その概要のみを示すならば、次のようになる。「科学技術社会を生きる」は担当者が3名であるが、授業内容は完全に共通化されている。「市民社会を生きる」は担当者が4名で、達成目標と成績評価方法のほとんどは共通化しているし、授業でグループワークを取り入れることなどの授業方法は共通化している。また、授業計画では「市民の悩み相談」

---

5) これら3学部のTGベーシックは泉キャンパスで開講されているが、工学部のTGベーシックは多賀城キャンパスで開講。

区分			科目名	開講期	開講学年 1年 前期	1年 後期	1年 単位	2年 前期	2年 後期	2年 単位	3年 前期	3年 後期	3年 単位	4年 前期	4年 後期	4年 単位	◎ 必修 / 選択必修
教養科目	第1類 基礎教育科目（TGベーシック）	人間的基礎教育	聖書を学ぶ	半期	●		2										◎
			キリスト教の歴史と思想	半期		●	2										◎
			キリスト教学A（キリスト教と倫理）	半期							○	○	2				4科目中1科目2単位必修
			キリスト教学B（キリスト教と宗教）	半期							○	○	2				
			キリスト教学C（キリスト教と文化）	半期							○	○	2				
			キリスト教学D（キリスト教と現代社会）	半期							○	○	2				
			市民社会を生きる	半期	○	○	2										
			地球社会を生きる	半期				○	○	2							
			科学技術社会を生きる	半期				○	○	2							
			キャリア形成と大学生活	半期	○	○	2										
		知的基礎教育	クリティカル・シンキング	半期							○	○	2				
			数理的思考の基礎	半期	○	○	2										
			統計的思考の基礎	半期	○	○	2										
			科学的思考の基礎	半期				○	○	2							
			情報化社会の基礎	半期	○	○	2										
			メディア・リテラシー	半期				○	○	2							
			読解・作文の基礎	半期	●		2										
			研究・発表の基礎	半期		●	2										
	第2類	人文系	哲学	半期	○	○	2										
			芸術論	半期	○	○	2										
			歴史学	半期	○	○	2										
			倫理学	半期							○	○	2				
			文学	半期	○	○	2										
			文化人類学	半期	○	○	2										
			地理学	半期	○	○	2										
		社会系	心理学	半期	○	○	2										
			社会学	半期	○	○	2										
			法学入門	半期	○	○	2										
			日本国憲法	半期				○	○	2							
			現代政治入門	半期	○	○	2										
			社会福祉論	半期				○	○	2							
			東北地域論	半期				○	○	2							
			震災と復興	半期	○	○	2										
		自然系	環境の科学	半期	○	○	2										
			自然の科学	半期	○	○	2										
			健康の科学	半期				○	○	2							
			先端の科学と技術	半期				○	○	2							
			生命の科学	半期	○	○	2										

注）●はその開講時期での開講を意味し、○○は前期、後期ともに開講することを意味する。

第1図　経済学科の教養教育科目に関する学科課程表

区分			科目名	開講期	開講学年 1年 前期	1年 後期	1年 単位	2年 前期	2年 後期	2年 単位	3年 前期	3年 後期	3年 単位	4年 前期	4年 後期	4年 単位	◎ 必修 / 選択必修
教養科目	第1類 基礎教育科目（TGベーシック）	人間的基礎教育	聖書を学ぶ	半期	●		2										◎
			キリスト教の歴史と思想	半期		●	2										◎
			キリスト教学A（キリスト教と倫理）	半期							○	○	2				4科目中1科目2単位必修
			キリスト教学B（キリスト教と宗教）	半期							○	○	2				
			キリスト教学C（キリスト教と文化）	半期							○	○	2				
			キリスト教学D（キリスト教と現代社会）	半期							○	○	2				
			市民社会を生きる	半期	○	○	2										
			地球社会を生きる	半期				○	○	2							
			科学技術社会を生きる	半期				○	○	2							
			キャリア形成と大学生活	半期	○	○	2										
		知的基礎教育	クリティカル・シンキング	半期							○	○	2				
			数理的思考の基礎	半期	○	○	2										
			統計的思考の基礎	半期	○	○	2										
			科学的思考の基礎	半期				○	○	2							
			情報化社会の基礎	半期	○	○	2										
			メディア・リテラシー	半期				○	○	2							
			読解・作文の基礎	半期	●		2										
			研究・発表の基礎	半期		●	2										
	第2類	人文系	哲学	半期	○	○	2										
			芸術論	半期	○	○	2										
			歴史学	半期	○	○	2										
			倫理学	半期							○	○	2				
			文学	半期	○	○	2										
			文化人類学	半期	○	○	2										
			地理学	半期	○	○	2										
		社会系	心理学	半期	○	○	2										
			社会学	半期	○	○	2										
			経営学	半期				○	○	2							
			法学	半期	○	○	2										
			日本国憲法	半期				○	○	2							
			現代政治基礎	半期	○	○	2										
			東北地域論	半期				○	○	2							
			震災と復興	半期	○	○	2										
		自然系	環境の科学	半期	○	○	2										
			自然の科学	半期	○	○	2										
			健康の科学	半期				○	○	2							
			先端の科学と技術	半期				○	○	2							
			生命の科学	半期	○	○	2										

注）●はその開講時期での開講を意味し、○○は前期、後期ともに開講することを意味する。

第2図　共生社会経済学科の教養教育科目に関する学科課程表

と題するトピックのうち5つと最終授業のまとめは共通化しているが、前半の授業8～9回は別々の内容になっている。「キャリア形成と大学生活」は担当者が3人で極端に異なるわけではないものの、それぞれ達成目標、授業内容は異なる記述になっている。なお、成績評価方法は、毎時間の振り返りレポートや課題提出などは共通しているが、配点などは異なっている。「地球社会を生きる」は3名で担当しているが、達成目標が共通化しているだけで他は基本的に別々になっていて、授業の中で取り上げる環境問題などのいくつかのトピックに共通性があるだけである。講義方法に関しても、シラバスからは共通性の有無も含めて確認することができない。

知的基礎教育科目の中では、「クリティカル・シンキング」は3年生に配当されているので、2014年度まで開講されない。そこで、他の5科目について確認すると、人間的基礎教育とは異なり、すべての講義科目でかなりの程度の共通化がみられる。「数理的思考の基礎」（担当者5人）、「情報化社会の基礎」（担当者2人）、「科学的思考の基礎」（担当者4人）ではシラバスは完全に統一されている。「統計的思考の基礎」も担当者3人の間で達成目標や授業計画は共通化されていて、成績評価方法に多少の相違が見られるだけである。「メディア・リテラシー」は担当者が3人であるが、2人はシラバスが完全に統一している。これに対して1名はまったく異なるシラバスになっている。以上のことから、授業内容の統一化というTGベーシックの基本方針に照らし合わせた場合、知的基礎教育科目ではかなりの程度共通化が達成されているものの、人間的基礎教育科目では知的基礎教育科目ほどには共通化は進んでいない。このような講義内容のあり方等が、「１ はじめに」で示した経営学部学生の座談会での内容に反映されているのかもしれない。

３　TGベーシックの実際

（１）履修登録状況

「学位授与の方針」の中の「Ⅰ．よく生きようとする態度をもつこと」と「Ⅱ．知的活動を続けるための基本的技能を身につけること」を具体化することを意図して設置されたTGベーシックであり、東北学院大学の学士課程で学ぶ学生すべてが共通して修得すべきものとしてその講義内容の統一化が目指されていた。これに対して、実際の学生のそれぞれの科目の履修登録状況を確認しておく。1～3年次においては、学生の年間履修登録上限（キャップ）は44単位である[6)]。したがって、1年生および2年生はこの条件の下で、TGベーシック、狭義

[6)] 4年生に関しては48単位となっている。なお、いずれにおいても「教育職員免許状の教科に関する科目」および「教職等に関する科目」は制限単位には含めない。

第１表　TG ベーシック科目の履修登録状況

科目名	2013 年度登録者数・登録率	2014 年度登録者数・登録率	備考
市民社会を生きる	748・52.7%	1228・55.5%	
	116・21.1%	290・30.3%	
地球社会を生きる	―	1136・73.3%	
	171・31.1%	108・12.0%	この中から２科目以上選択
科学技術社会を生きる	―	495・32.0%	
	400・72.7%	432・64.1%	
キャリア形成と大学生活	548・38.6%	744・30.8%	
	206・37.5%	187・21.5%	
クリティカル・シンキング	―	―	
	280・50.9%	192・24.2%	
数理的思考の基礎	874・61.6%	1230・58.9%	
	431・78.4%	409・63.6%	
統計的思考の基礎	774・54.5%	1076・49.2%	
	414・75.3%	402・60.9%	この中から５科目以上選択
科学的思考の基礎	―	1121・72.3%	
	348・63.3%	400・55.1%	
情報化社会の基礎	807・56.9%	1417・65.8%	
	279・50.7%	378・47.5%	
メディア・リテラシー	―	1282・82.6%	
	258・46.9%	301・36.9%	
読解・作文の技法	949・66.9%	1073・53.3%	
	205・37.3%	222・25.5%	
研究・発表の技法	234・34.7%	585・21.0%	
	177・71.1%	230・25.6%	

注）　各年度の登録者数・登録率は上段が経済学部・経営学部・法学部（泉キャンパス開講授業）の数値を示し、下段は工学部（多賀城キャンパス開講授業）の数値を示している。なお、「―」は科目の配当学年の関係からその年度には開講していないことを意味する。

また、登録率に関しては開講初年度に関しては配当学年の対象学部の学生数で除しているが、2 年目の開講科目に関しては上位学年も登録が可能となる。そのため、配当学年の学生数に、新カリキュラムの対象となる上位学年の在籍数から前年度の登録者数を引いた学生数を加えた数を対象学生数とし、この学生数で登録者数を除した値を登録率としている。なお、2 年生には原級止めなどの学生が在籍し、これらの学生は旧カリキュラムでの授業運営になるが、ここではそれらの学生数を減じていない。

の教養教育、外国語科目、保健体育科目、専門教育科目から必修科目および選択科目を登録することになる。その中で、2013年度と2014年度のTGベーシックの履修登録状況を示したのが第1表である。ただし、「聖書を学ぶ」と「キリスト教の歴史と思想」は必修科目であるので記載から除いている。また、年度ごとの受講生であるので、前期と後期に開講されている場合にはその合計であり、前期不合格であった受講生が、後期に修正登録をして再度受講した場合には、履修登録は2名となる。なお、表の脚注にもあるように、新カリキュラム実施2年目になる2014年度に関しては、登録率を計算するに当たっての分母が適切であるのか、否かの問題が残る。そのため、2年続けて開講されている科目であっても、この理由から単純に2013年度と2014年度の登録率を単純に比較することは検討の余地が残るであろう。さらには、実際の登録に際しては、時間割の制約もあるので、学生はフリーハンドで科目を選択できるわけでないことも、検討にあたって留意する必要がある。

さて、履修実態を確認するならば、「人間的基礎教育」においては、泉キャンパス（経済学部・経営学部・法学部）では、「市民社会を生きる」と「地球社会を生きる」の登録率が高く、いずれも2014年度には登録者総数が1,000人を超す状態にある。他方、「科学技術社会を生きる」は32.0％と、前出の2科目と比べて低い登録率になっている。これと傾向が逆になっているのが多賀城キャンパス（工学部）で、「科学技術社会を生きる」が、2013年度72.7％、2014年度64.1％と高い登録率になっているが、「市民社会を生きる」と「地球社会を生きる」の登録率は12.0％から31.1％にとどまっている。これは、文系学部学生と理系学部学生の志向性の違いから生ずることなのかもしれないが、TGベーシックは学問体系に基づく知識などの伝授を意図したものではなかった。いずれの科目も「学位授与の方針」の「Ⅰ.よく生きようとする態度をもつこと」を担うのであるならば、学生が自らの専門分野に近いと想定されるような科目にウェートを置いて（専門基礎的な位置づけと考えて）選択しているということが妥当なのかどうか、検討を必要とすることかもしれない。

「人間的基礎教育」において、泉キャンパスでも、多賀城キャンパスでも、共通して見られる特徴は、「キャリア形成と大学生活」の登録率が決して高くはないと言うことである。いずれのキャンパスにおいても登録率は4割を超えてはいない。大学入学後間もない学生にキャリア形成、大学卒業後の進路、そして大学生活の過ごし方などを考えると言うことは実感を持つことは難しいのかもしれない。けれども、「人間的基礎教育」のひとつとしてみた場合には、この科目を表中の他の3科目と同列に扱ってよいのかどうかは、検討の余地が残るかもしれない。学生の履修パターンを登録状況から推察するならば、文系学部では「市民社会を生きる」＋「地球社会を生きる」の組み合わせが、工学部では「科学技術社会を生きる」＋他の3科目のいずれかといった組み合わせにキリスト教関係科目が加わるパターンが

多くなっているとみられる。

「知的基礎教育」については、学部ごとに開講されている「読解・作文の技法」、「研究・発表の技法」を除いて、また3年次に配当されているために文系学部（泉キャンパス）で現在まで開講されていない「クリティカル・シンキング」を別として、他の5科目についての登録状況に関しては、次のような特徴を指摘することができる。泉キャンパスで2014年度に初めて開講された科目を除くならば、いずれの科目も登録率は50～65％で比較的平均化している。2年次開講の「科学的思考の基礎」や「メディア・リテラシー」も今後経年変化で平均化する可能性があるのかもしれない。多賀城キャンパスでは、2013年度も、2014年度も、「数理的思考の基礎」と「統計的思考の基礎」の登録率は6割以上となっているが、「科学的思考の基礎」と「情報化社会の基礎」はややそれを下回っている。「メディア・リテラシー」はさらにそれを下回っている。これらは文系科目との認識によって他と比べて相対的に敬遠されているのであろうか。多賀城キャンパスで工学部の1年生を対象に開講されている「クリティカル・シンキング」も、必ずしも登録率が高いわけではない。

「読解・作文の技法」と「研究・発表の技法」に関しては、泉キャンパスでは後者の登録率が、多賀城キャンパスでは前者の登録率が著しく低く、2～3割にとどまっている。ただ、これらの開講は学部ごとに開講されていて、その履修登録の状況は学部ごとに大きく異なっている。第2表をみると、「読解・作文の技法」は経済学部と工学部で登録率が低く、5割を大きく下回っている。これに対して、経営学部と法学部では登録率が高く、特に法学部では

第２表　「読解・作文の技法」および「研究・発表の技法」の学部別履修登録状況

	2013 年度登録者数・登録率	2014 年度登録者数・登録率
【読解・作文の技法】		
経済学部	310・46.1%	416・36.1%
経営学部	272・73.9%	280・58.7%
法学部	367・96.8%	377・97.4%
工学部	205・37.3%	222・25.5%
【研究・発表の技法】		
経済学部	234・34.7%	167・13.6%
経営学部	―	224・56.7%
法学部	―	194・51.6%
工学部	177・71.1%	230・25.6%

注）　表記の方法は第１表と同じ

2年ともほぼ全員が登録している。「研究・発表の技法」に関して、経済学部での登録率は2013年34.7％、2014年13.6％と「読解・作文の技法」をさらに大きく下回っている。工学部では2013年の71.1％が、翌年には25.6％へと急激に低下している。ただ、これは既述のように登録率の計算上の問題、すなわち計算に際しての分母の設定に由来するのかもしれない。ちなみに、工学部での実際の登録者数は177から230に増加している。この科目が2年次に配当されている経営学部と法学部では登録率が5割を超えているが、「読解・作文の技法」よりは低い割合になっている。「学位授与の方針」の中の「Ⅱ．知的活動を続けるための基本的技能を身につけること」を具体化するこの「知的基礎教育」であるが、この領域での土台になると考えられる「読解・作文の技法」と「研究・発表の技法」の履修状況としてこの状態が妥当であるのか、否かは、議論の余地があるのかもしれない。

「知的基礎教育」科目の履修パターンをモデル化するならば、次のように推測することができるであろう。ただし、「読解・作文の技法」と「研究・発表の技法」はそれぞれの学部ごとの登録率を用いるが、他の6科目（「クリティカル・シンキング」は工学部のみ）に関しては、全体の登録率をすべての学部にあてはめることとする。経済学部の場合には「数理的思考の基礎」＋「統計的思考の基礎」＋「科学的思考の基礎」＋「情報化社会の基礎」＋「メディア・リテラシー」の組み合わせが多く、4割程度の学生がこれらの中の1～2科目を「読解・作文の技法」や「研究・発表の技法」に替えている。工学部では「数理的思考の基礎」、「統計的思考の基礎」、「科学的思考の基礎」、「情報化社会の基礎」から3科目、その他の4科目から一つと言った登録パターンが多いと推察される。経営学部と法学部では、（2014年度の経営学部は別として）「読解・作文の技法」を登録した上で、残りの6科目の中から4科目登録しているケースが多いと推測できる。

（２）授業評価アンケート結果の概要

新カリキュラムに関してはこれまで2013年度前期・後期、2014年度前期において実施されて「学生による授業評価」の結果が集計・報告されている。そのアンケートの詳細についてはそれぞれの報告書等に譲るとして、ここでは次の設問項目についてTGベーシック科目の集計結果を概観する。すなわち、ここで取り上げる項目は「問4 シラバスは授業科目の選択に参考になりましたか」、「問7 授業の目的ははっきりしていましたか」、「問9 授業の内容に興味を持てましたか」、「問10 授業の到達目標をあなたはどれくらい達成しましたか」、「問17 受講者数は適切だと思いますか」、「問18 この授業は総合的にみてよかったと思いますか」の6項目である。なお、ここでは紙幅の制約もあるので、学部単位ではなく、科目開講学部全体での集計結果を、また2013年度と2014年度の調査結果を合計して検討する。ただし、工

第３表 「学生による授業評価」アンケート回答数

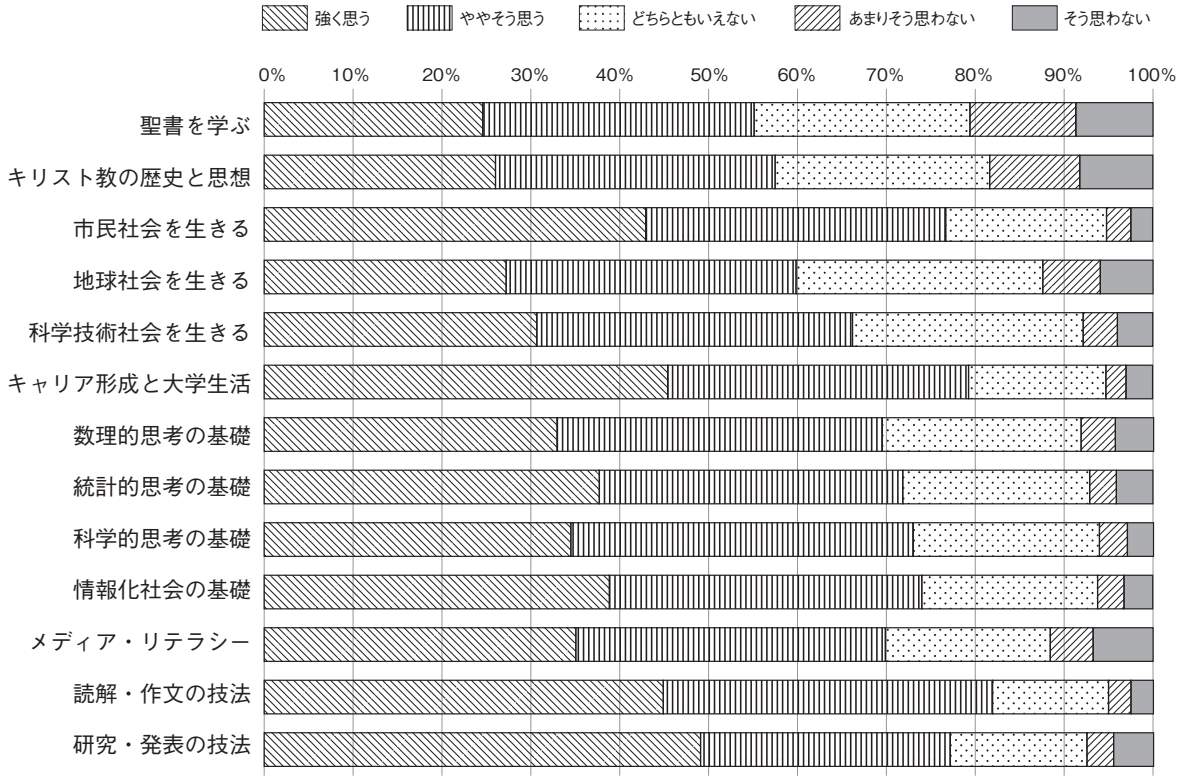
科目	2013 年度前期	2013 年度後期	2014 年度前期	合計
聖書を学ぶ	3704[1)]	―	3960[1)]	7664
キリスト教の歴史と思想	―	3917[1)]		3917
市民社会を生きる	376	112[2)]	542	1030
地球社会を生きる	74	53	268	395
科学技術社会を生きる	359	―	453	812
大学生活とキャリア形成	602	―	780	1382
数理的思考の基礎	919	465	887	2271
統計的思考の基礎	634	0	642	1276
科学的思考の基礎	184	90	685	959
情報化社会の基礎	407	421	730	1558
メディア・リテラシー	78	147	645	870
読解・作文の技法	0[2)]	0[2)]	714	714
研究・発表の技法	―	0[2)]	269[2)]	269

1）旧カリキュラムの学生の再履修者が含まれている。
2）学部別の質問表で実施したアンケート解答数は含まない。

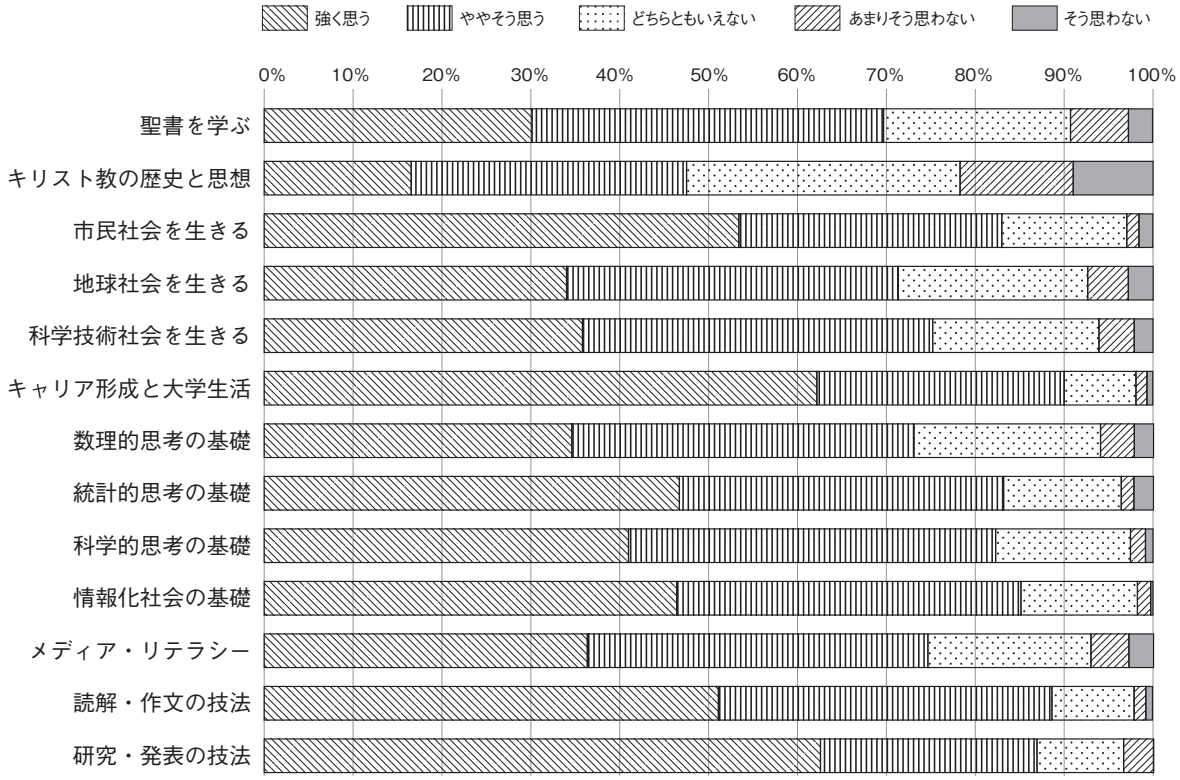
学部のみで開講している「クリティカル・シンキング」は検討からは除外する。また、TGベーシックに分類される授業の「学生による授業評価」は原則として共通設問フォーマットで行うことになっているが、一部で学部専用の設問フォーマットで実施したものもみられる。ここでは比較検討の必要から原則としては共通設問フォーマットによる回答のみを取り上げる[7)] が、学部専用設問フォーマットに類似の設問がある場合にはそれを援用して比較しているところもある。なお、それぞれの科目のアンケート回答数は第3表に示してある。

さて、第3図は「問4 シラバスは授業科目の選択に参考になりましたか」の回答の集計である。今日の大学教育改革の中ではシラバスは授業選択の指針としても、また自主的学修の手引きとしてもその重要性が謳われている。それに対して、この設問に対する回答は「強く思う」と「ややそう思う」と言った、ポジティブな評価が検討対象としている13科目すべてで50％を超している。ただ、少し詳しくみると、「聖書を学ぶ」と「キリスト教の歴史と思想」と言ったキリスト教関係科目が50％台にとどまっている。これはこれらの科目が必修科

[7)] なお、「学生による授業評価」の設問は、2014年度後期から全学・全科目共通のフォーマットで実施されている。



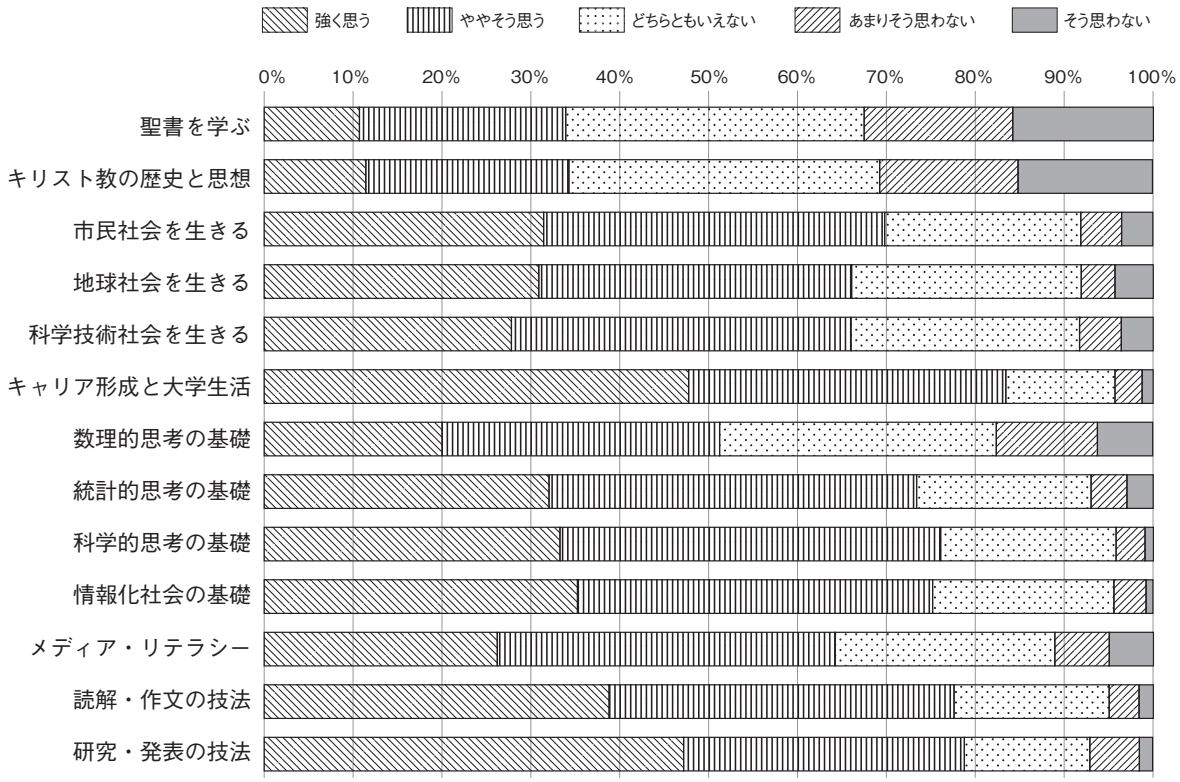
第３図　「シラバスは授業科目の選択の参考になりましたか」回答集計



第４図　「授業の目的ははっきりしていましたか」回答集計

目であり、選択の対象ではないことが関係しているのかもしれない。これ以外の他の科目は70％台を超えているが、とりわけ「キャリア形成と大学生活」、「読解・作文の技法」、「研究・発表の技法」ではポジティブな評価が80％前後と高くなっている。これは、いずれも講義名だけではその内容把握が困難であるために、シラバス参考の程度が高くなっているのかもしれない。

第4図は「問7 授業の目的ははっきりしていましたか」の設問への回答の集計である。授業の達成目標はその学修の意義の認識であるが、そこでは「強く思う」と「ややそう思う」の合計であるポジティブな評価は全体として多く、13科目中7科目で80％前後に達している。ここでも、特に「キャリア形成と大学生活」、「読解・作文の技法」、「研究・発表の技法」が高いスコアを示しているが、なかでも「キャリア形成と大学生活」と「研究・発表の技法」は90％近い数字を示している。キリスト教関係科目では「聖書を学ぶ」で70％がポジティブな評価になっているが、「キリスト教の歴史と思想」は50％を下回っている。「キリスト教の歴史と思想」のデータは2013年度1年だけに限定されるものであるが、このような結果となる理由は不明である。ここで取り上げている授業科目の中で唯一必修であることが関係しているのかもしれないが、今後とも継続的な調査を通じてこの理由を明らかにする必要がある

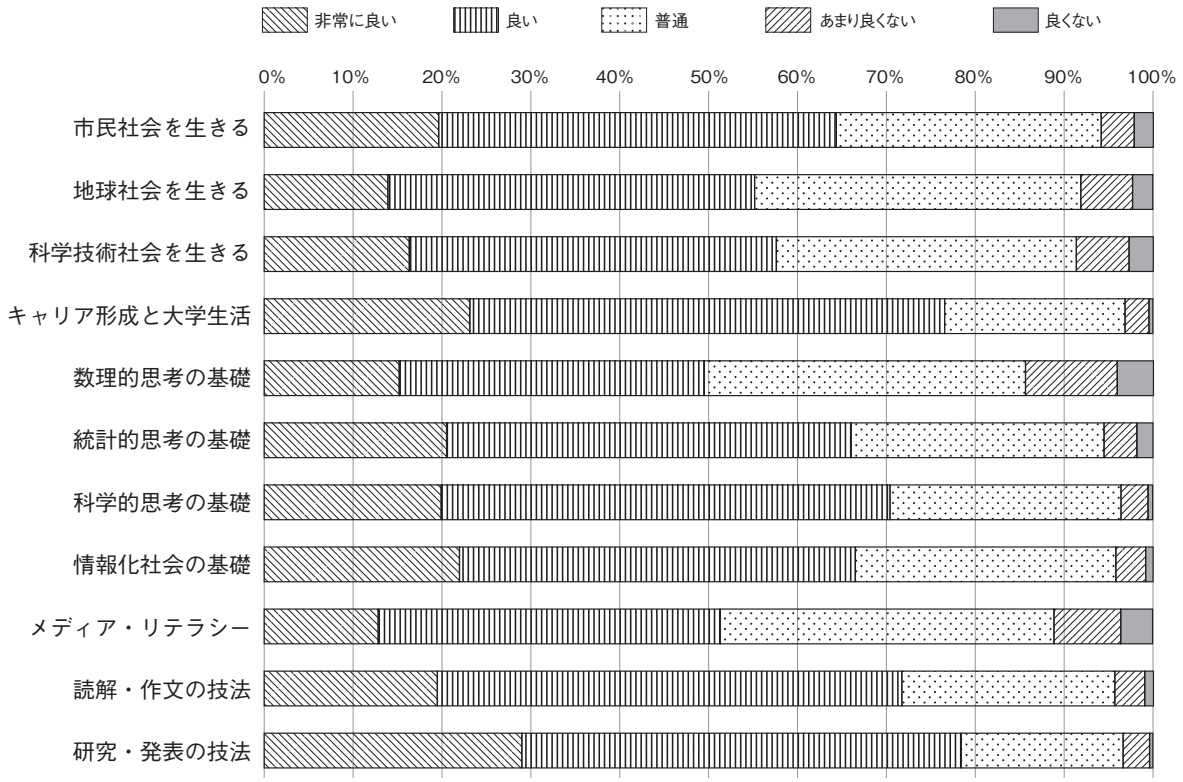


第５図 「授業内容に興味が持てましたか」回答集計

だろう。

第5図は「問9 授業の内容に興味を持てましたか」への回答の集計であるが、キリスト教関係では同様の設問がないので、「この授業を通じてもっと学びたいという意欲を喚起されましたか」と言う設問の集計を当てている。いずれも授業内容が受講生のレベルや関心に合致したかどうか、そしてそこから発展的な学修への契機となっているかどうかが問われている。ただ、設問が異なることが要因かもしれないが、キリスト教関係科目でポジティブな評価が低くなっている。つまり、「強く思う」と「ややそう思う」の合計がいずれも40%にとどいていない。他の科目では、「数理的思考の基礎」を除く10科目でポジティブな評価が60%以上になっていて、特に「キャリア形成と大学生活」では80%を超えている。なお「数理的思考の基礎」は担当者5人の間でシラバスが完全に統一化しているのにもかかわらず、何らかの条件の相違によるのか、授業ごとの評価のばらつきが大きくなっている。

第6図は「問10 授業の到達目標をあなたはどれくらい達成しましたか」の設問の回答集計であるが、キリスト教関係科目の調査ではこれに該当する設問はみられない。そこで、これに関してはキリスト教関係科目を除いて概観する。さて、個々ではポジティブな評価はほとんどの科目で50%を超えているが、70%前後を超しているのは4科目にとどまっている。ま

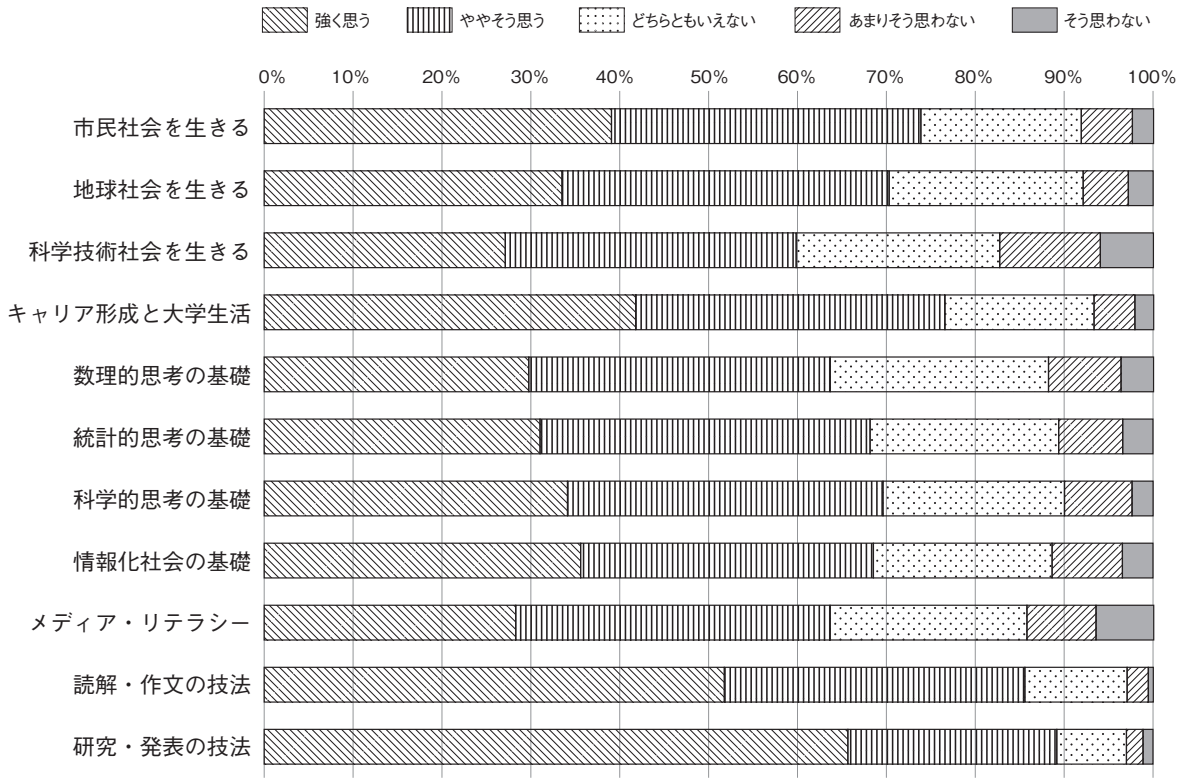


第６図 「授業の到達目標をでれくらい達成しましたか」回答集計

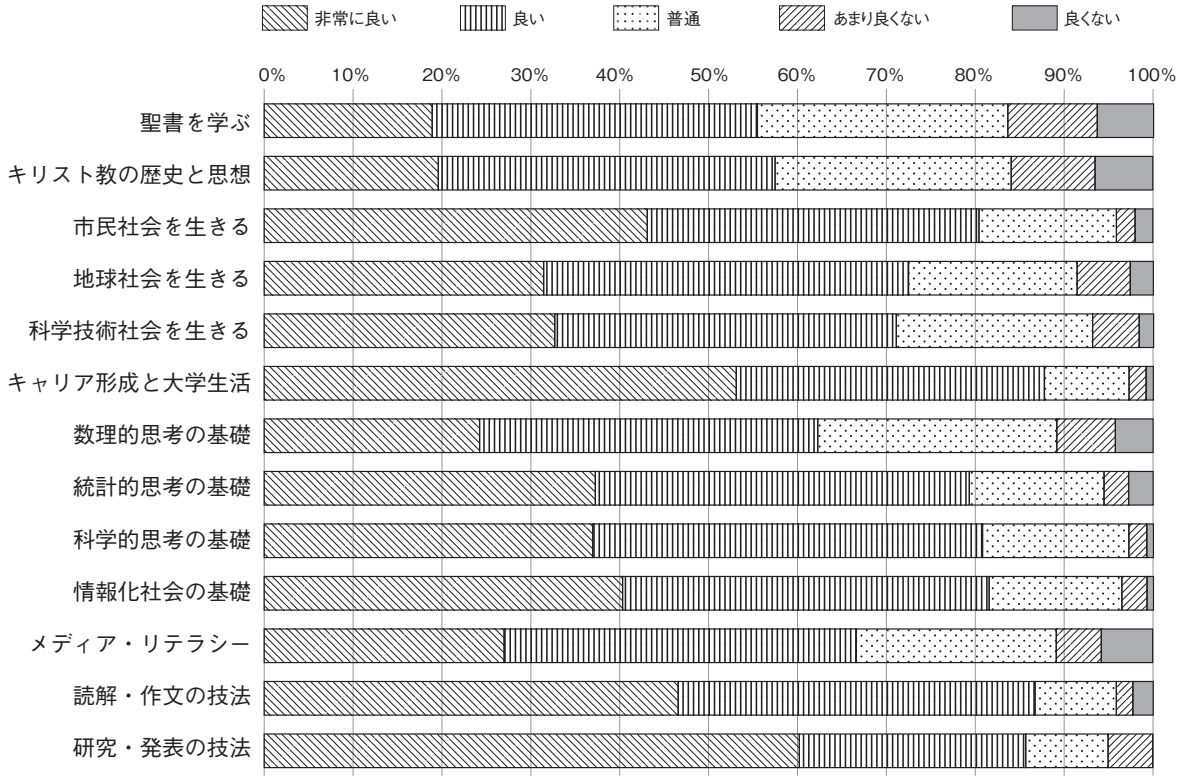
た、「数理的思考の基礎」では50％を切っている。この設問は他と比べて「非常に良い」「良い」の割合が全体的に低くなっているが、これは到達目標に対する回答者の自己評価ということから、他の設問と異なる傾向が現れているのかもしれない。とは言え、到達目標の設定は学修指導のあり方とも関わる問題でもあるので、今後の授業運営に際しては検討する余地のある問題なのかもしれない。なお、次の設問とも関連するが、「研究・発表の技法」では50人以上の1クラスと少人数による授業運営を意図したクラス、とりわけ10人未満のクラスが7クラスあるが、その間には個々での回答に関して特段の差は見られない。

第7図は受講者規模に関する設問であるが、キリスト教関係科目の調査ではこれに類する設問もみられないので、ここでもこれを除く11科目を概観する。さて、ここでは授業のやり方にも影響されるであろうが、全体としてみるならば300人程度までの受講生であるならば「キャリア形成と大学生活」や「読解・作文の技法」を含めて、ネガティブな評価が多いとはいえない。「研究・発表の技法」は上述のように少人数で運営されているクラスもあるが、全体的にはこのようなクラスでのこの項目の評価はポジティブなものが多い傾向にある。とは言え、クラス規模がひとケタになるとネガティブな評価も散見される。

最後に、第8図は「問18 この授業は総合的にみてよかったと思いますか」への回答の集計



第7図 「受講者数は適切だと思いますか」回答集計



第８図　この授業の総合評価

である。人間的基礎教育の科目は、キリスト教関係科目を除いて他はすべて70％以上が「非常に良い」と「良い」になっている。とりわけ、「市民社会を生きる」と「キャリア形成と大学生活」ではそれぞれ80％を超えている。なお、キリスト教関係科目もそれぞれ50％を超しているので、評価が悪いわけではない。知的基礎教育科目はすべての科目でポジティブな評価が60％を超えている。さらに、「科学的思考の基礎」、「情報化社会の基礎」、「読解・作文の技法」、「研究・発表の技法」ではポジティブな評価が80％を超えている。なお、「研究・発表の技法」では、受講者規模での評価と同じく、少人数で運営されているクラスで評価が高い傾向が見られるが、ただその規模がひとケタになるとネガティブな評価もみられる。とは言え、TGベーシックの科目に関する総合評価は全体としては高い水準にあるとみることができるであろう。

４　むすびにかえて ー今後検討課題となる可能性のあるいくつかのテーマー

以上が、TGベーシックの設置の意図と経緯、さらにはその導入から１年半の時点での概況である。特に履修登録状況と授業評価の概要に関しては限られた資料での概観であるので、今後さらに包括的な検証が必要であろう。ただ、そのような制約の中であっても、最後に、

今後課題になる可能性のあるテーマを確認しておく。

まずあげられることは、TGベーシックの名称の認識に関する問題である。現在、この名称は“通称”として用いられていて、学科課程表においての正式名称は教養科目第1類である。そのためもあってか、座談会での発言にもあるように学生の認識、さらには教員の認識も充分とは言えないようである。人間的基礎教育と知的基礎教育の科目群の位置づけを明確にし、各科目の到達目標などの理解を徹底するためにも、TGベーシックを正式な名称とし、その下で履修指導することを検討することが必要だろう。なお、TGベーシックが“学問の前段階”、“高校教育と大学教育の橋渡し”との役割を持つならば、受講生（新入生）の変化に応じたこれらの科目群での取り扱い内容（到達目標や講義内容、授業方法など）の不断の見直しは必要になるであろう。

次にあげられるテーマは、授業規模であり、このことは授業運営の在り方とも関連する問題である。つまり、各授業は少人数であることが望ましいとしても、受講者が少なければ良いということでもないようである。もちろん一定の限度があるとしても、受講者数が多い場合には授業運営の工夫が問われることになる。つまり、授業の中での受講生の参加や考える時間などの確保が必要になってくる。ただ、このような授業形態であるならば、従来の講義形式と比べて受講生に提供される知識・情報の量は制限される可能性が大きくなることがある。そのため、ここでも到達目標を含めたシラバス等の不断の見直しが必要であろうし、共通シラバスであるならば、担当者間での情報交換や検討などが必要になるであろう。

この点、「読解・作文の技法」と「研究・発表の技法」において、経営学部とその他の学部での受講者数や授業運営方法の相違が受講生の学修効果にどのような相違をもたらすのかは大きな検討テーマであろう。現在は、授業評価の回答を概観する限りにおいては大きな差はみいだせない。ただ、今後、ある程度の回数を重ねた後には、何らかの相違が見いだされるかもしれないので、この点に関する継続的な情報収集と検討が期待される。

4つ目のテーマとしては、TGベーシックの科目選択の偏りがあげられる。例えば、文系学部において、理系とみなされるような科目の履修率が低くなっていること。工学部では文系とみなされるような科目の履修率が低くなっていることがあげられる。ただ、これは学生の関心のあり方や時間割の問題などとも関わることであるので、検討テーマになるかどうか自体、不明確である。けれども、「学位授与の方針」の中の「Ⅰ．よく生きようとする態度をもつこと」を具体化しようという人間的基礎教育のなかで、「大学生活とキャリア形成」の、「Ⅱ．知的活動を続けるための基本的技能を身につけること」を具体化しようという知的基礎教育のなかで、（学部にもよるが）「読解・作文の技法」と「研究・発表の技法」の履修率が低いことは検討する余地があるだろう。「大学生活とキャリア形成」は、人間的基礎教育

のかなではキリスト教関係科目とならぶ柱として位置づけられる。キリスト教関係科目が建学の精神を背景としてこれからよく生きようとする指針や倫理観などを学生に示そうとするものであるのに対して、「大学生活とキャリア形成」は専門教育が直接的には職業教育を意図していない、いわゆる“教養系大学”の学生に対して、卒業後の進路を具体的に考えさせる契機を提供しようとするものである。また、(学部によっては現在未開講であるが)「クリティカル・シンキング」を知的基礎教育のなかでその完成領域であると位置づけるならば、「読解・作文の技法」と「研究・発表の技法」はその領域の基盤・土台と位置づけることができる。とりわけ汎用性が高いこれら3科目の履修のあり方は教養教育を重視する東北学院大学の根幹に関わる問題であるかもしれない。いずれにしても、「大学生活とキャリア形成」、「読解・作文の技法」、「研究・発表の技法」(そして「クリティカル・シンキング」)の今後の履修業況を把握したうえで、履修指導や選択・必修のあり方などを検討する必要があるかもしれない。

5つ目としては、キリスト教関係科目のあり方であろう。授業評価のアンケート集計結果では、「シラバスは授業科目選択の参考になりましたか」、「授業の目的がはっきりしていましたか」、「授業内容に興味が持てましたか」「授業の総合評価」において、他のTGベーシックの科目と比べて芳しいスコアとはなっていない。これはこれらの科目が唯一の必修であることに由来するのかもしれない。とは言え、これらの科目のあり方は東北学院の建学の精神それ自体にかかわる問題であるし、TGベーシックの人間的基礎教育の大きな柱でもある。この科目それ自体、あるいはこの科目を取り巻く諸状況を考える機会が必要なのかもしれない。

最後に、TGベーシックの全体的な評価は比較的良好であるとみられる。そのような中で、授業評価が相対的に低い状況にある科目の授業内容や授業運営方法などを考えることによって、TGベーシックがより充実したものになるとおもわれる。このことは、教養大学としての東北学院大学の基盤をより強固なものにする一歩になるであろう。そのためにも、今後ともTGベーシックの科目に関する継続的な調査・検討が求められるであろう。

謝辞

本研究で使用した諸資料の収集に際して、学事課ならびに多賀城キャンパスと泉キャンパスの学務係の方々にお世話になりました。また、「学生による授業評価」のデータ利用に関しまして学生による授業評価委員会の承認を頂きました。記してお礼申し上げます。